

「極東書店ニュース」700号到達を記念して

西南学院大学経済学部 花田洋一郎

この度、「極東書店ニュース」が700号に到達したという知らせを極東書店福岡営業所の担当者からお聞きした。心よりお祝い申し上げる。本書に現在まで大いに助けられてきた者として、感謝の気持ちを示したい。「極東書店ニュース」第1号は1954年6月に刊行されたようで、戦後10年もたたないうちに欧米出版社の新刊情報を掲載した洋書案内誌は船出をしたことになる。欧米の学術情報が入手困難であった時代、新刊案内は研究者にとって希望の光であり、学術研究における「アリアドネの糸」であったろう。私が学生時代を過ごした1980年代末から1990年代初頭においてもそれは変わらなかった。

1988年の春、熊本大学文学部史学科西洋史学コースに進んだ大学2年生の私は、先生や先輩から事務室と研究室に置かれているいろんな洋書新刊案内をみせてもらい、ここから欧米の歴史専門書を注文するのだと教わった。専門書を自分で買うということを想像できなかった私は、複数の洋書案内を手にとってそこにぎっしりと記載された英仏独伊西葡蘭露羅希などの諸言語で書かれた新刊書・古書情報に圧倒された。ガリア書房、エックス・リブリス、南欧図書、丸善、紀伊國屋書店、エルベ洋書店、イタリア書房などの洋書案内と共に「極東書店ニュース」があった。大学3年生のころに最初に洋書を買ったとき、英書は極東書店とナウカ、フランス書はガリア書房とエックス・リブリスにお世話になった。「極東書店ニュース」はアメリカ、イギリス歴史学界のみならず、ヨーロッパ大陸諸国の新刊情報を豊富に載せており、基本文献はほぼ網羅していたので、欧米における研究動向を把握するのに極めて有効であった。「極東書店ニュース」にはドイツ語、フランス語、イタリア語、ラテン語など英語以外の新刊書にも日本語訳がついているのだが、時折その訳が変だったり明らかな誤訳だったりしたときは、心の中で「つつこみ」をしたものである。

その時から早35年が過ぎた。学術情報をめぐる環境は著しく変化し非常に便利になった。新刊書を探索するコストは低減し、瞬時に情報を手に入れることができるようになったし、10数年もかけて探索した史料集なども容易に手に入るようになった。他方で、新刊案内書の多くは廃刊となり、ページを開いてどのような本が出版されたのかを見るドキドキ感、わくわく感は減ってしまった。フランス歴史学界、ドイツ歴史学界、イタリア歴史学界などの新刊情報を一覧できることで研究潮流が国によってどのように違うかを感じ取ることも、情報が多くなりすぎたせいか難しくなったように思う。

学術情報をめぐる環境が激変する中、「極東書店ニュース」は自分のやり方を続けながら、ネット媒体に姿を変えつつも私たちにまとまった新刊情報を提供し続けてくれている。これは現場の担当者のたゆまぬ努力の賜物であるが、わたしは彼らの確固たる信念に強い共感を抱く。世界各国の出版社が提示する新刊情報には様々なレベルの情報が紛れている。研究者にとってどのような本が重要なのか、担当者は常に判断しながら取捨選択し新刊情報に載せるのだ。時には書名の翻訳に大いにてこずることもあるだろうが、そうした労苦のもと

揃えられた新刊情報は、確実に私たちに重要な情報として届いている。わたしは新刊情報で得た書物を通じて研究の方向性とか、新しいアイデアを幾度も得ることができたので、新刊情報に育てられたと勝手ながら思っている。

私は、現在の「極東書店 online」に不思議とわくわく感を抱く。ウェブであっても極東書店という洋書店の入り口（HP）から店内に入るといった感覚があるからだろうか。いっそのことHPに大きな門をデザインして、そこから上質の新刊情報の世界に私たちを誘うような仕様を試してみたいかだろうか？「門をたたきなさい、そうすれば、開かれる」（新共同訳「マタイによる福音書」7）。